

愛知郡長久手町

# 三ヶ峯古窯発掘調査報告書

— 三ヶ峯第9号窯・第10号窯・第12号窯 —

1999年

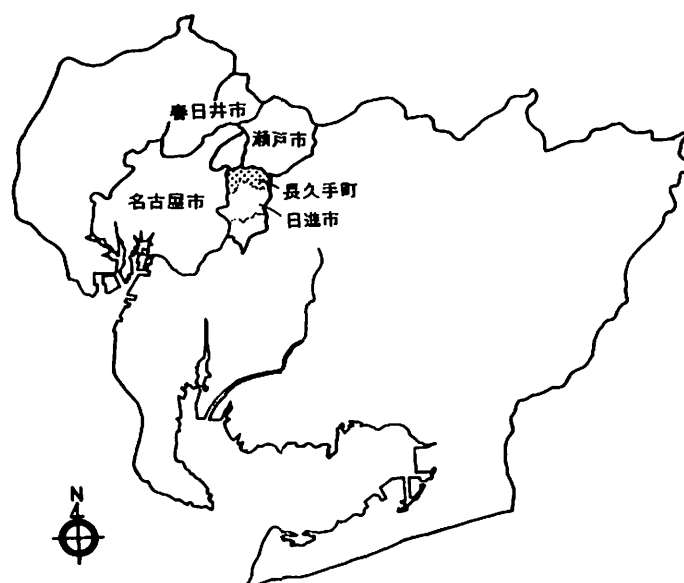
三ヶ峯第9号窯・第10号窯  
第12号窯発掘調査会



愛知郡長久手町

# 三ヶ峯古窯発掘調査報告書

— 三ヶ峯第9号窯・第10号窯・第12号窯 —



1999年

三ヶ峯第9号窯・第10号窯  
第12号窯発掘調査会

## 例 言

1. 本書は、愛知郡長久手町三ヶ峯にある三ヶ峯第9号窯、第10号窯、第12号窯の発掘調査報告書である。
2. 調査は当該地が宅地開発されることになり1998(平成10)年11月16日から25日まで行った。
3. 調査にあたり「三ヶ峯第9号窯・第10号窯・第12号窯発掘調査会」を結成し、下記の者が担当した。

事 務 局	長久手町教育委員会社会教育課課長	加藤八州夫
		主事 中村 美枝
調 査 主 任	日本考古学協会員	七原 恵史
調 査 員	成澤 逸雄	
調査補助員	大淵 園美・水野 満・松原 加代子	
4. 発掘調査に際し、愛知北部開発株式会社(代表取締役 打田 重文)のご協力を得た。記して謝意を表します。
5. 三ヶ峯古窯跡付近現況図は須藤事務所(土地家屋調査士 須藤 一彦)が作成した。
6. 遺物の整理・実測・トレースは、七原 恵史・大淵 園美・水野 満・松原加代子が行い、七原 恵史が執筆した。
7. 出土遺物は長久手町教育委員会が保管している。

## 目 次

1. 位置と地形 .....	1
2. 調査の経緯 .....	1
3. 調査日誌 (抄).....	4
4. 第9号窯 .....	4
5. 第9号窯灰原 .....	7
6. 第10号窯 .....	10
7. 第12号窯 .....	10
8. 考 察 .....	13

### 挿 図 目 次

第1図 三ヶ峯古窯跡位置図
第2図 三ヶ峯古窯跡付近現況図
第3図 三ヶ峯第9号窯窯体実測図
第4図 三ヶ峯第9号窯窯体遺存箇所推定位置図
第5図 第9号窯灰原および第12号窯灰原 調査地点位置図
第6図 第9号窯窯内出土遺物実測図
第7図 第9号窯灰原出土遺物実測図 (1)
第8図 第9号窯灰原出土遺物実測図 (2)
第9図 第12号窯灰原 I トレンチ東壁断面図
第10図 第12号窯灰原出土遺物実測図
第11図 長坂古窯出土遺物 (1)、旭ヶ丘第2号窯出土遺物 (2) 実測図
第12図 長久手町古窯分布図

### 図 版 目 次

図版 1 三ヶ峯古窯跡調査状況および遺構 (1)
図版 2 三ヶ峯古窯跡調査状況および遺構 (2)
図版 3 三ヶ峯古窯跡調査状況および遺構 (3)
図版 4 三ヶ峯古窯跡調査状況および遺構 (4)
図版 5 三ヶ峯古窯跡調査状況および遺構 (5)
図版 6 三ヶ峯古窯跡調査状況および遺構 (6)
図版 7 三ヶ峯古窯第9号窯灰原出土遺物
図版 8 三ヶ峯古窯第9号窯・第12号窯出土遺物

## 1 . 位置と地形

三ヶ峯第9号窯・第12号窯は、長久手町町域の東南隅で、東は豊田市、南は日進市に接するところの丘陵に営まれていた。交通路でいえば北西～南東方向に通る県道田柵・名古屋線の北側の丘陵である。

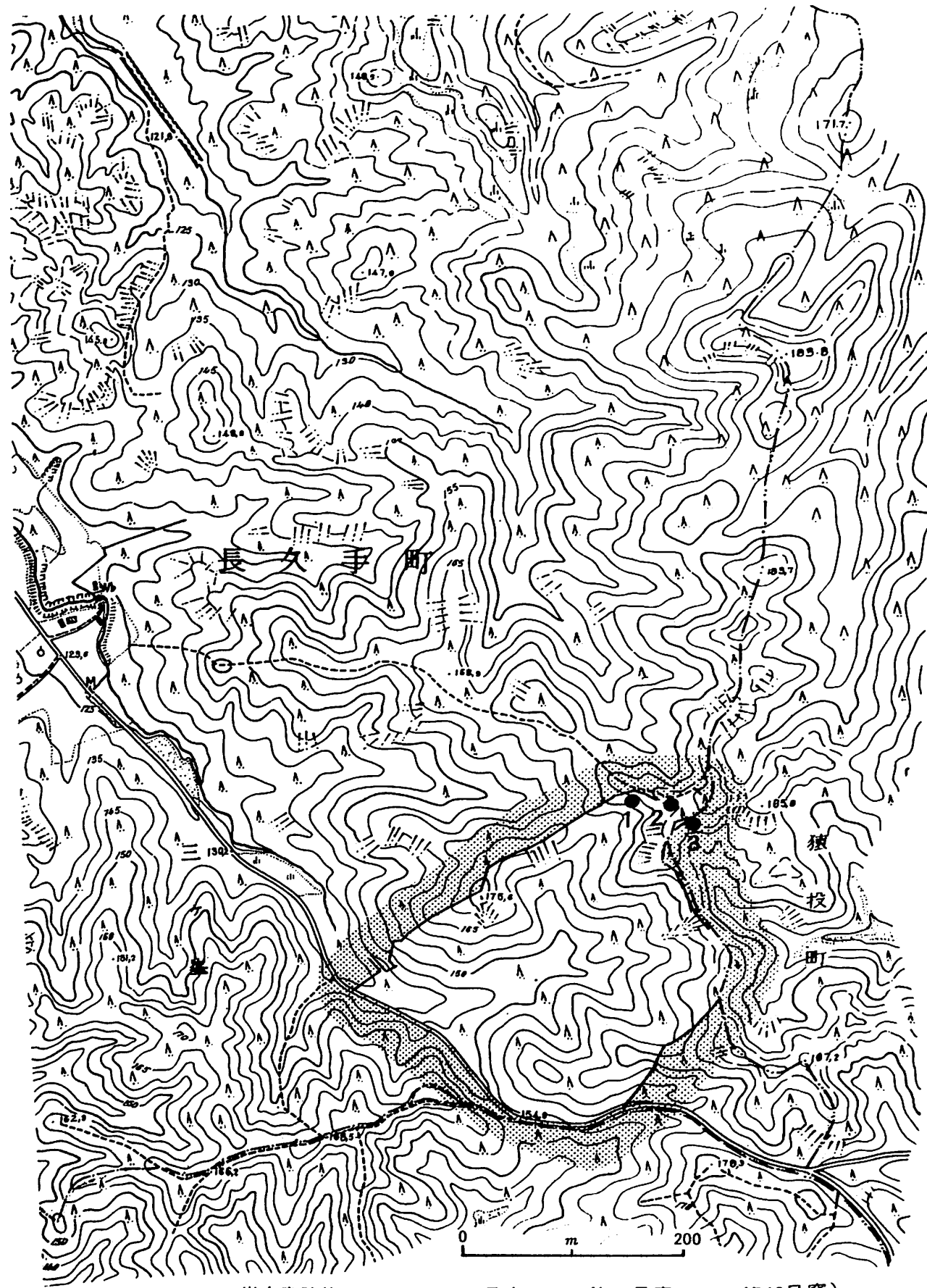
現地は1963 (昭和38) 年頃に開発され、住宅建設の準備がなされたまま放置されてきたので、松を主体とする雑木林になっている。また現地の北は愛知青少年公園が作られその中に諸施設があり、南には愛知県農業総合試験場や愛知県立芸術大学があり、日進市との境には三ヶ峯配水場が、また日進市側には名古屋商科大学がある。

1963 (昭和38) 年に作成された地図をみると、この付近一帯は標高170m～180mの丘陵が広がっていたことが解る (第1図)。丘陵は解析されていくつかの支丘と支谷ができており、支丘の基部には標高180mを越える丘頂が存していた。この地図と開発された地点を重ね合わせると、現地はかつて南西方向に張り出す支丘があった。標高160m～180mの等高線が示す範囲がそれである。この支丘の頂部に近いところに古窯が営まれていた。

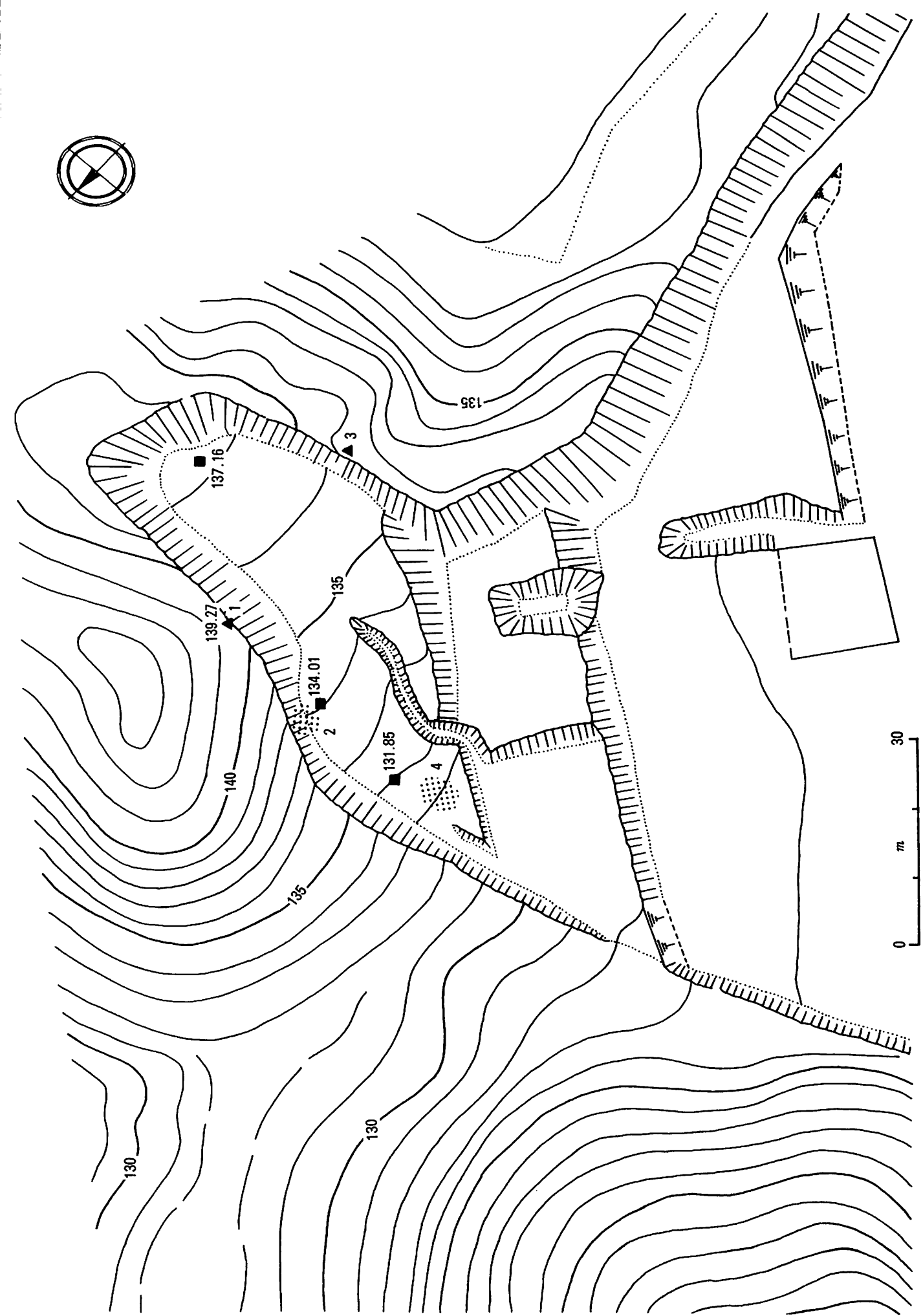
三ヶ峯と呼称される地域は長久手町の南東部から南部にかけて連続する広い範囲の丘陵地帯で、地質的には第3紀統・鮮新世の瀬戸層群の上部になる矢田川累層である。この丘陵には平安時代から鎌倉時代にかけて窯業が営まれた。三ヶ峯第3号窯は平安時代に蓋坏・長頸瓶・灰釉碗などを焼成し、三ヶ峯第1号窯・第2号窯、第4号窯～第7号窯は鎌倉時代に山茶碗や小皿を焼成していた。今回調査した第9号窯・第10号窯・第12号窯もこの時期に営まれた古窯である。その後山茶碗の生産は衰退し、窯業生産は瀬戸市に中心が移ることになる。

## 2 . 調査の経緯

三ヶ峯古窯跡の調査は三ヶ峯第9号窯・第10号窯・第12号窯がある地域に、愛知北部開発株式会社が宅地造成をすることになり、これに先立って発掘調査を行ったものである。現地では去る3月愛知県教育委員会文化財課と長久手町教育委員会によって試掘調査が行われ、窯体の一部があること、灰原が遺存していることが指摘されている。今回「三ヶ峯第9号窯・第10号窯・第12号窯発掘調査会」(事務局 長久手町教育委員会社会教育課長加藤八州夫) を結成し、1998 (平成10) 年11月16日から25日まで行った。



第1図 三ヶ峯古窯跡位置図 (1: 第12号窯 2: 第9号窯 3: 第10号窯)



第2図 三ヶ峯古窯跡付近現況図 (1: 第9号窯 2: 第9号窯灰原 3: 第10号窯 4: 第10号窯灰原 ■は控杭、数字は杭頂部の標高を示す)

### 3. 調査日誌 (抄)

11月16日 (月曜日) 晴 第12号窯跡に設定し試掘されている十字形のトレンチの南側の表土を取り除きながら土器を採集する。約20cm掘り下げたところで、灰黒色をした古窯の破片や土器が散布している面が現れたのでこれを追って十字トレンチの南全域を掘り広げた。さらに3月に掘ったトレンチ (以下旧トレンチと呼ぶ) の中に落ち込んだ土砂を取り除いて作業を終えた。

17日 (火曜日) 雨のため中止。

18日 (水曜日) 晴れたり曇ったり 第12号窯旧トレンチの東を調査したが、南のような状況はなかった。南の表面に出ている土器を水洗いして写真撮影の準備をする。午後、写真撮影。引き続き調査区域の平板測量を行い、レベルを記入。第9号窯旧トレンチ周辺の土器採集。

19日 (木曜日) 晴 午後曇一時小雨 第9号窯の窯体清掃。丘陵の高いところにわずかに窯体の一部が残っている。一人は崖にキャタツを立て掛けて登り、一人は窯体の上手から掘り下げる。土は下へ落とす。場所が狭く、窯内には松の木が生え、根がはびこっており、手間がかかった。残っていたのは窯体の焼成室上方と煙道部である。第9号窯灰原とされたトレンチ側の土器を採集する。第12号窯の土器をとりあげる。

20日 (金曜日) 晴 第9号窯平面図、側面図作成。残っている窯の範囲が狭いことと、片側が崖になっているので測図しにくい。午前中で終わる。午後、第12号窯灰原の断割を試みる。しかし土が堅くしまっていて、唐鍬も跳ね返るほどである。約10~15cm掘り下げたがさして成果がないので終了としたが、念のためバックホーで深掘りすると、40cmほど下に灰層が現れ、土器が採集できた。改めて断面を実測する。南側には白色粘土が堆積している。

第9号窯に属すると推定されている灰原から土器を採集する。

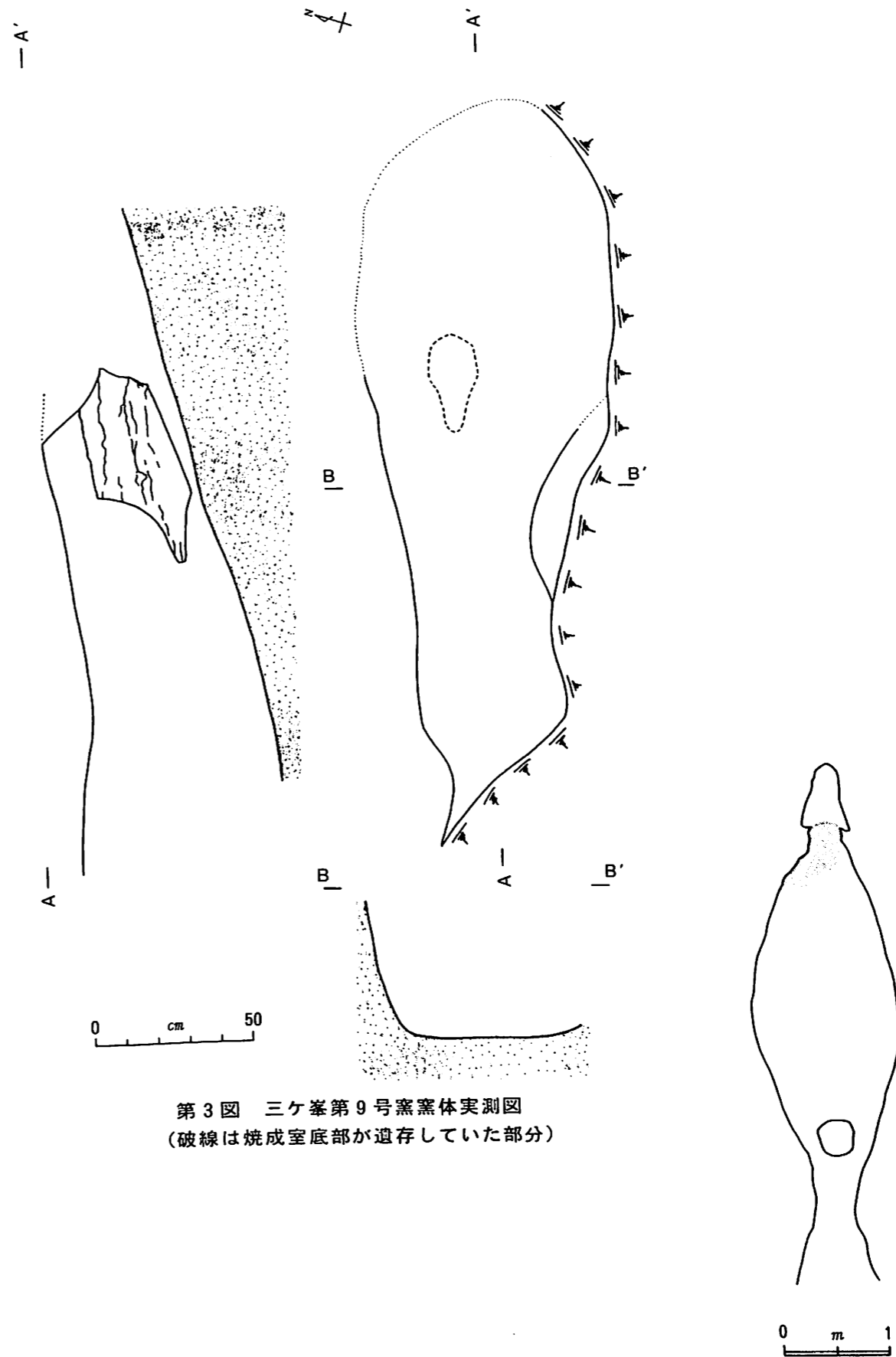
24日 (火曜日) 晴 第9号窯灰原 (崖下) の遺物採集。第12号窯灰原調査。Ⅱトレンチを掘り下げる。灰層はない。引き続きⅢトレンチを掘り下げる。Ⅲトレンチも灰層はない。第9号窯灰原の旧トレンチそばを掘り下げて遺物を採集する。本日採集した遺物はコンテナ5箱を越えた。

25日 (水曜日) 晴 第9号窯残存部から灰原までの距離を計測。第9号窯灰原の遺物採集、旧トレンチ埋め戻し。第12号窯灰原トレンチ埋め戻し。発掘道具と土器を搬出。現地調査終了。

### 4. 第9号窯

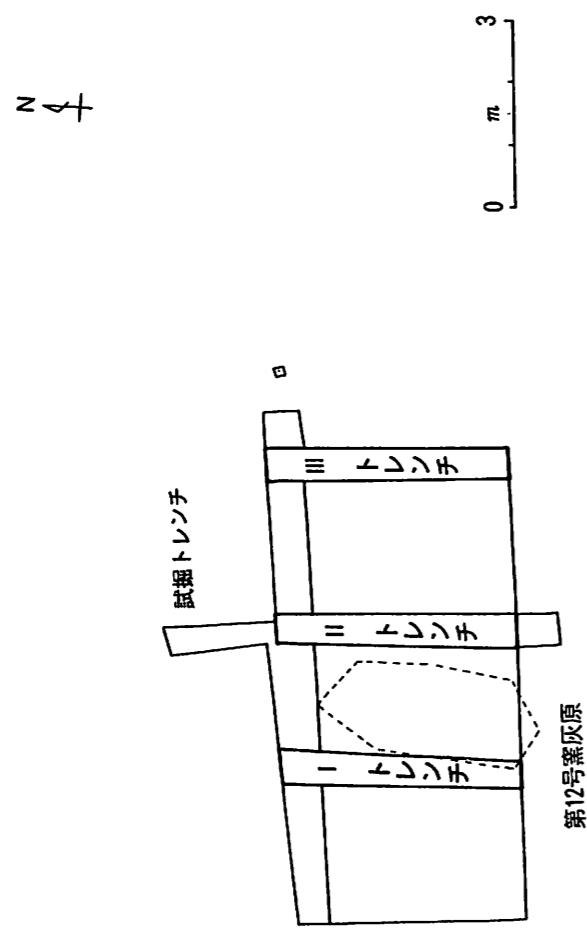
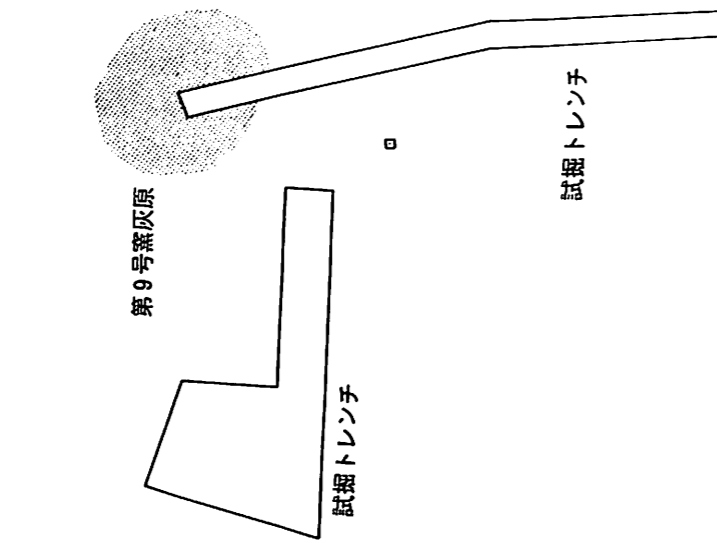
位置 第9号窯は、愛知青少年公園境界線に張ってあるフェンス際にある (第2図の1)。

構造 第9号窯は、土取りされた崖面に辛うじて窯体の一部が残っていた。残存する部分は主軸をほぼ東西にとっており、東が高く西が低く、傾斜角度は18度である。残存する窯体の南側はほとんど削り取られているが、わずかに残存している部分がある。ここが焼成室と



第3図 三ヶ峯第9号窯窯体実測図  
(破線は焼成室底部が遺存していた部分)

第4図 三ヶ峯第9号窯窯体遺存箇所推定位置図 (アミ部分)



第5図 第9号窯灰原および第12号窯灰原調査地点位置図

煙道部の境と推定され、その幅は0.4mである。煙道部の範囲は明瞭でない。床面はわずかに遺存していたが、木の根が入っており、根を除去する作業中に破損した。

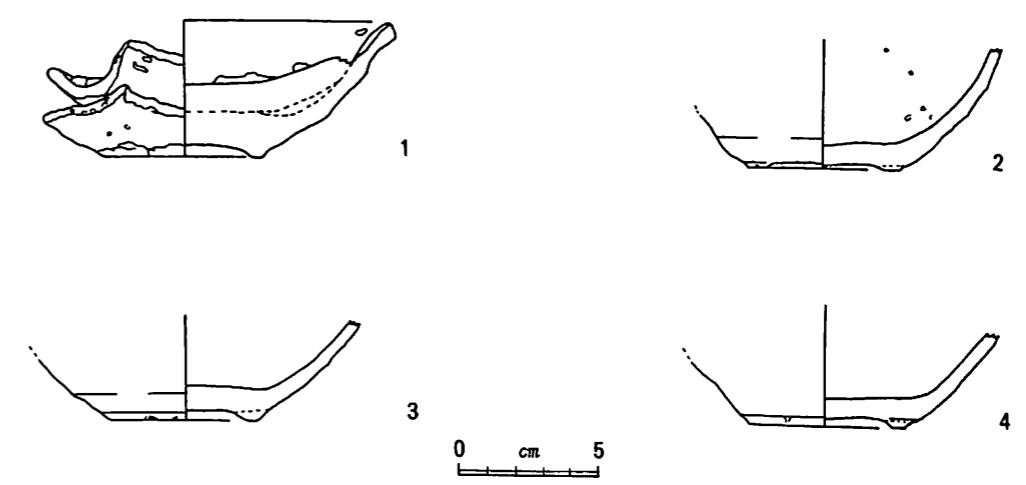
左側（北側）の窯壁は長さ0.7m、高さ0.3mの範囲で遺存していた。乳白色を呈し、ひだができていた。窯壁が遺存していたのはこの部分だけで、これより西は窯壁が剥落しており壁の裏側の赤く焼けしまったところが残っていた。この窯壁が剥落している部分は外へ広がる様相を示しており、焼成室であろう。

第9号窯の遺存していた部分が窯のどこに該当するのか、瀬戸市水南中古窯をモデルにして推定すると第4図のようになる。すなわち、遺存していた場所は、焼成室の上方で、煙道部との境にあたる場所である。（註）

なお、窯内には約20個体の遺物と焼台などが残っていた。遺物は高熱によって融着したものがああり、窯が温度上昇によって崩壊したことが推定される。

註. 松澤和人・河合君近・佐野 元『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告 第10集 水南中古窯』1995 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター

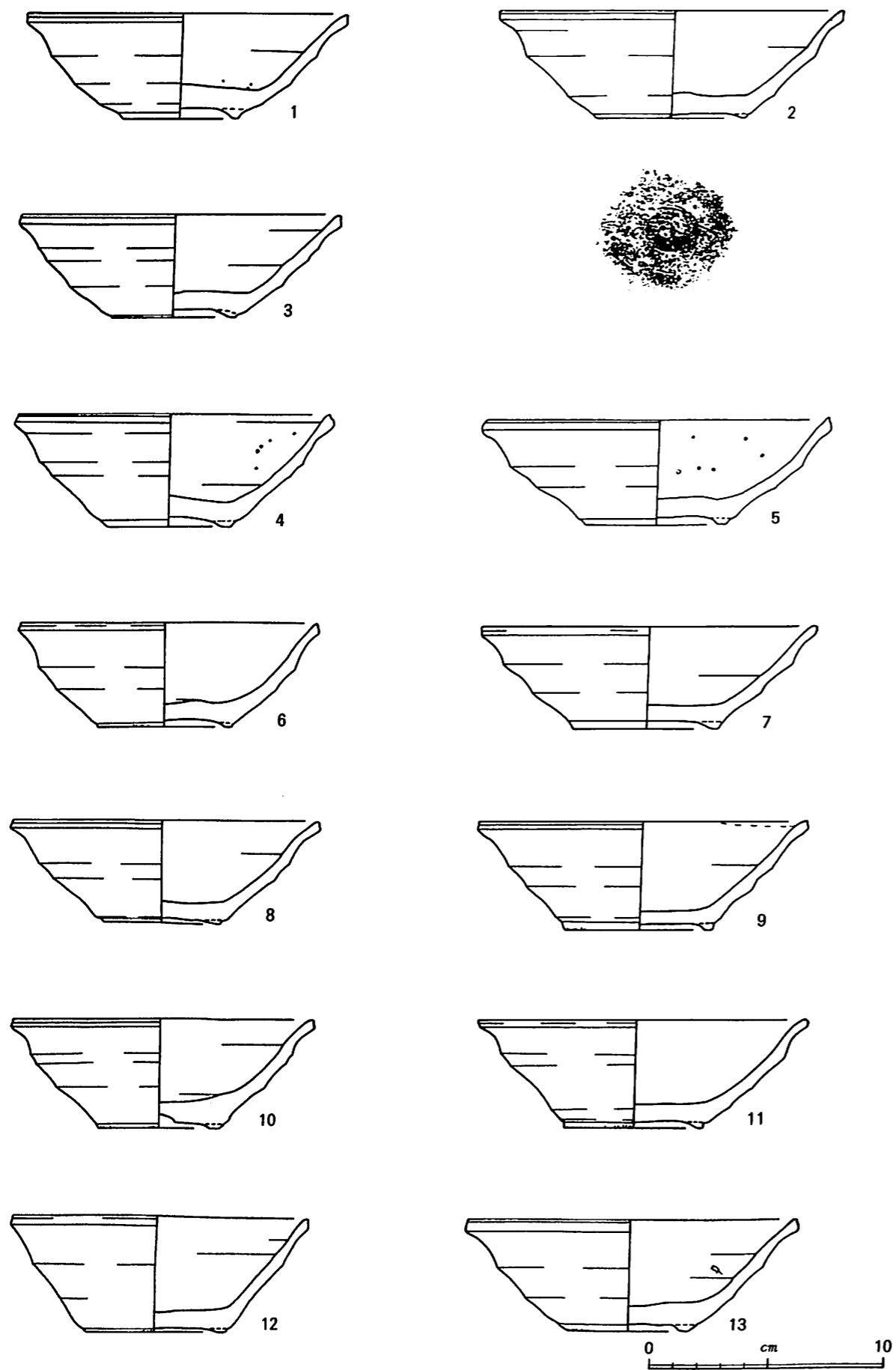
遺物（第6図の1～4） 窯内から出土した遺物は破片ばかりで、口縁部まで残っているものは2枚重なって出土したもの（1）だけである。口径は14cmほどと推定される。2～4はいずれも口縁部が欠けている。底径は5.2～5.5cm、高台の内側をなでつけている。底部の糸切の跡は残っていない。



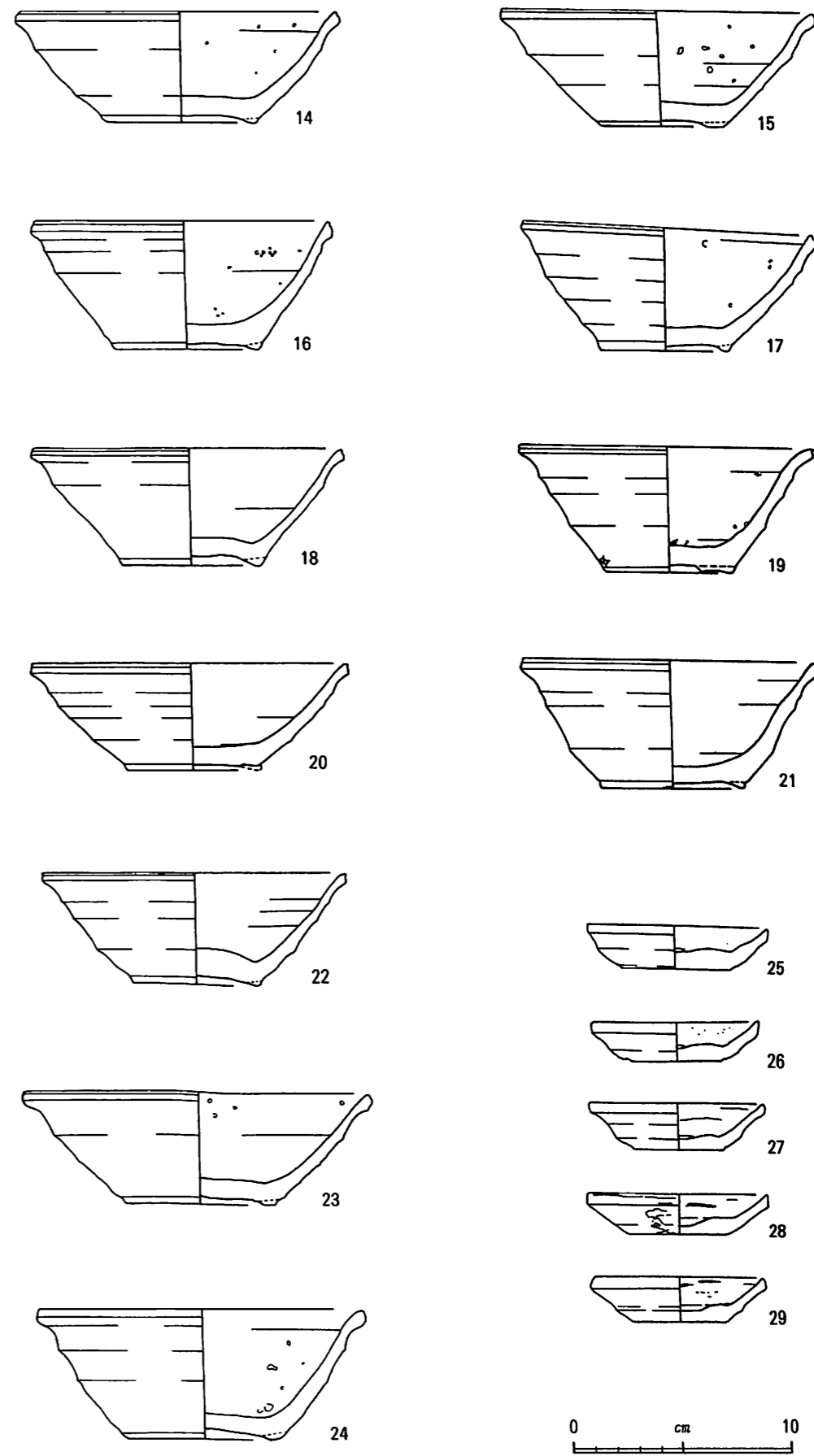
第6図 第9号窯窯内出土遺物実測図

### 5. 第9号窯灰原

第9号窯西側の崖下に遺物が散布していた（第2図の2、第5図）。第9号窯本体残存部から隠れるような位置にあったので別の窯が存在していたことも考えられたけれど、第9号窯の延長線上から西へ約8mの地点にあたることと、遺物が折り重なっており、焼土や炭化物



第7图 第9号窑灰原出土文物实测图(1)



第8图 第9号窑灰原出土文物实测图(2)



が付着しているものもあり、土取工事の時、灰原の下部が抉られ、灰原ごと落下した状態であったので第9号窯の灰原の遺物と推定した。

遺物は試掘の際に採集されたものと今回採集したもののうち、底部が良好に遺存しているものを1個とし、破片になっているものは2～3点を1個として数え、その総数は1078個体であった。

**山茶碗 (第7図の1～13・第8図の14～24)** 器体が比較的良好に残っているもの24個を計測した。個々の遺物の計測値は別表のとおりである。口径推定14.5cm前後、高台径5.8cm、高さ5cm前後である。体部は斜め上方にほぼ直線的に立ち上がり、口縁近くで薄くなり、口端は丸くつく。体部は外側からナデ整形した後に内面をナデているので、その時に生ずる胎土が外側にまわっている。高台は断面三角形で低く、内側をナデつけている。高台には粉跡がつく。

胎土には細かく砕いた長石が混ぜられていて、ところどころで噴出している。また小さい礫も混じっており、器面に突き出しているものがある。23・24は口端を玉縁状につくっている。いずれもみこみには指による押さえがある。2のみこみは円形に浮き出していて、他のおさえと異なっている。

**小皿 (第8図の25～29)** 第9号窯の灰原から採集した遺物は山茶碗が圧倒的に多く、小皿は第8図にかかげたわずか5点だけである。

小皿は口径8cm前後、底径4～5cm、高さ2cm前後である。高台は省略され、底部から斜め上方に立ち上がり口端に面をつくる。みこみは指で押さえられている。薄いねずみ色を呈したものが多く、1点は灰白色を呈したものがあある。胎土には山茶碗と同様長石や小礫が混入されていて、礫が器面に飛び出している例がある。

## 6. 第10号窯

第10号窯は第9号窯の窯体残存部と土取跡をはさんで対照的な位置にあり、相互の距離は約34mである(第2図)。

この土取跡の崖面にポッカリ穴があいている(写真参照)が、盗掘が行われた跡であろう。窯体がある場所は豊田市域になるので、古窯の存在を予想するにとどまった。

第10号窯で採集された土器の実測図は『長久手町史 資料編五 考古』に掲載されている。

## 7. 第12号窯

第9号窯の窯体残存部から約40m、第9号窯灰原から西へ約17mの地点には試掘のための十字形トレンチが設定されたところで、十字トレンチの西南四分の一を約20cm掘り下げたところ、遺物や窯壁あるいは焼台の破片などが散布していた。これが灰原の残存と考え、さらに

三ヶ峯 第9号窯灰原出土 山茶碗計測値表

(単位:cm)

	番号	口径	器高	高台径	備考
第7図	1	(15.0)	5.0	5.3	底部に薬の跡あり。残存約半分
	2	(14.5)	5.15	6.3	
	3	(14.8)	4.95	5.6	
	4	(14.2)	5.3	5.8	
	5	(14.1)	5.1	5.9	
	6	(14.0)	5.1	(6.0)	
	7	(14.2)	5.0	6.0	
	8	(14.3)	5.15	5.3	
	9	(14.0)	5.3	6.1	
	10	(14.1)	5.55	5.6	
	11	14.0	5.45	5.9	
	12	(14.0)	5.6	6.4	
	13	(14.1)	5.6	5.0	
第8図	14	(14.3)	5.0	6.4	内面に釉がかかる
	15	(14.0)	5.1	5.6	口縁一部が残る 残存約半分
	16	(12.1)	5.9	6.3	
	17	13.1	5.6	6.0	内面に淡緑色の釉がかかっている 内面に窯糞付着。底部に凹みがある 高台がはがれて体部下方に融着
	18	(13.1)	5.3	6.0	
	19	(13.4)	5.65	5.7	
	20	(13.5)	4.8	(5.7)	口縁玉縁状。淡緑色の釉が付着
	21	(13.4)	5.85	6.4	
	22	(12.9)	4.9	5.3	
	23	(14.2)	5.3	6.4	
	24	(14.0)	5.9	6.4	

三ヶ峯 第9号窯灰原出土 小皿計測値表

(単位:cm)

	番号	口径	器高	高台径	備考
第8図	25	8.2	1.9	5.0	ねずみ色。直径8mm程の小石が噴き出している
	26	7.7	1.7	4.2	ねずみ色。口縁部両面を欠く。窯糞付着
	27	(8.0)	2.1	4.1	灰白色。焼けひずみがある
	28	(8.3)	1.9	4.8	残存半分。灰白色
	29	(7.8)	2.0	4.2	残存的半分。灰白色

三ヶ峯 第12号窯灰原出土 山茶碗計測値表

(単位:cm)

	番号	口径	器高	高台径	備考
第10図	1	-	-	5.2	口縁部欠損。高台一部欠けている
	2	-	-	5.4	口縁部欠損。底部に凹みあり
	3	-	-	5.2	口縁部欠損。強いおさえがある
	4	-	-	5.4	口縁部欠損。底部に凹みあり

8. 考 察

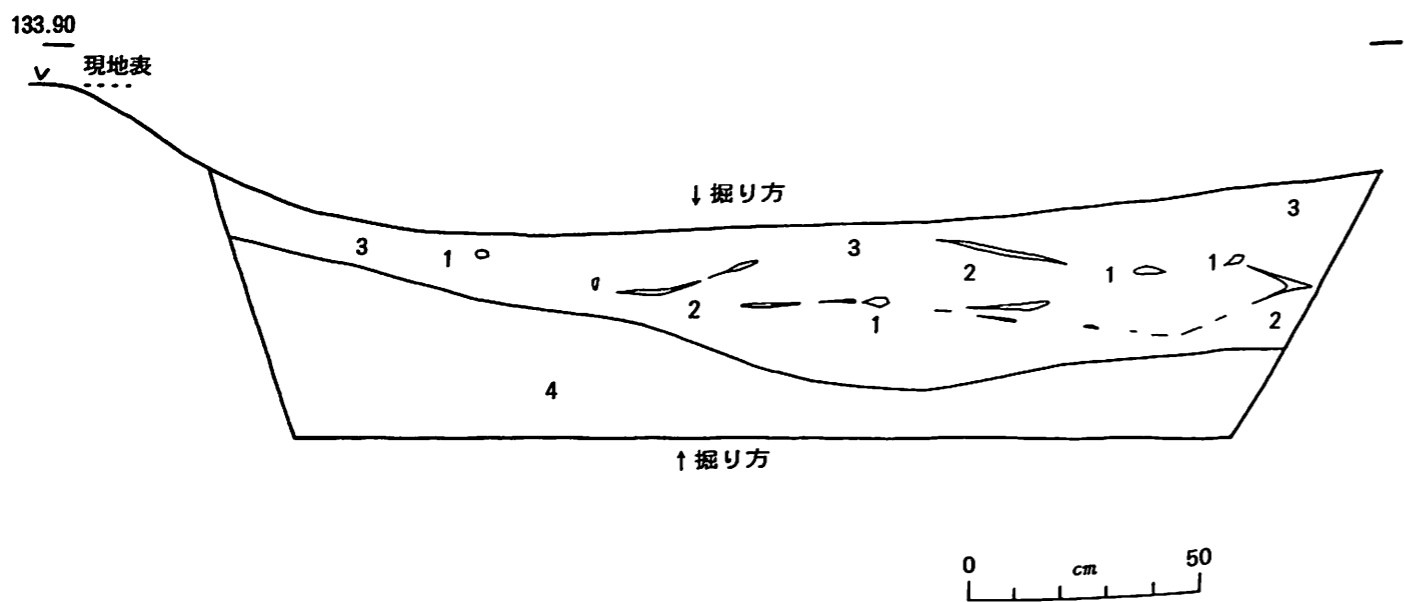
断割りを行ったが固くしまっており、灰原はこれだけであったと判断したが、念のためバックホーで深掘りすると（Iトレンチ）これより下に灰原が広がっていた。遺物を採集し、Iトレンチより2m東へトレンチ（IIトレンチ）を掘り下げてみたが、ここには灰原あるいは窯体は全くなかった。念のためさらにIIトレンチより東へ3mの地点にIIIトレンチを掘り下げてみたが、ここにも灰原あるいは窯体はなかった。従ってIトレンチより東へ約2mの地点に灰原の起点あるいは窯体の前端があったもので窯の主体部はすでに壊されている。

三ヶ峯と呼称される範囲は広く、現在の愛知青少年公園から南にかけて、さらに愛知県農業総合試験場や愛知県立芸術大学に及ぶ丘陵地である。丘陵はかつては標高180mを越えるところもあったけれど、現在は諸施設が建ち、もとの地形を保持しているところは少なく、最高で175.9mである。

この丘陵に「三ヶ峯」を冠する古窯が12基あり、その分布状況は第12図のようである。このうち第11号窯（第12図の11、以下同じ）は8世紀前半に築かれた古窯で、第3号窯（9）は9世紀前半に築かれた。第11号窯では蓋坏、盤、平瓶が焼成され、第3号窯では須恵器の蓋坏、坏、長頸瓶、灰釉碗などが焼成された。三ヶ峯第1号窯（12）と第2号窯（13）は、愛知県立芸術大学構内に築かれていたもので山茶碗と小皿、陶丸を焼成していた。第8号窯（15）は愛知県農業総合試験場の川地内に築かれていた。窯体はすでに亡失していたようであるが、山茶碗と小皿が採集されている。

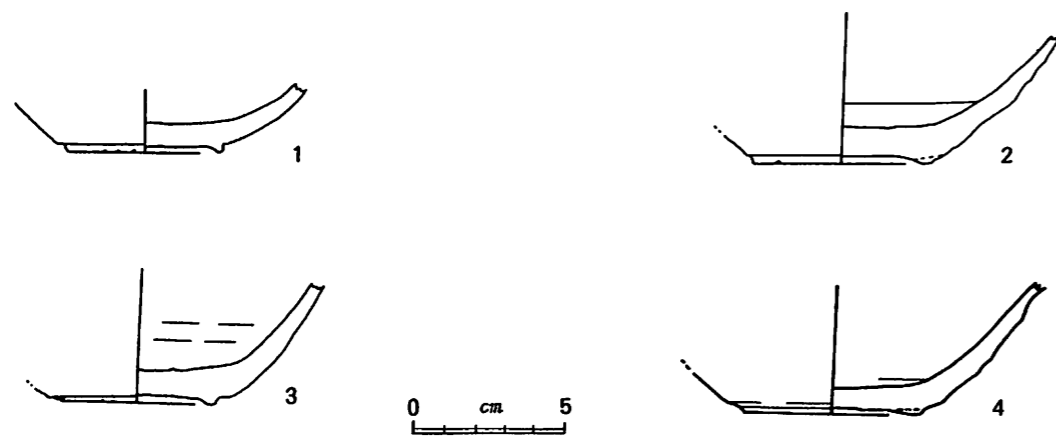
三ヶ峯第1号窯（12）、第2号窯（13）、第8号窯（15）の山茶碗は体部が直線的に開く形で、高台は低い。胎土には長石粒が多数含まれており、器面に吹き出している。小皿の体部は底から斜め上方に開き、高台はない。今回調査した第9号窯（20）・第12号窯（19）から出土した山茶碗や小皿も同一形態をしており、瀬戸窯編年の第6形式から第7形式の時期に生産されていたと考えられる（註1）。この時期の古窯は堀越古窯（8）、一ノ井第1号窯（18）、鴉ヶ廻間古窯（6）、三ノ池古窯（14）、棒振第2号窯（7）、杵の洞古窯（24）、福井古窯（23）、片平古窯（5）があり、13世紀の前半から中葉にかけて長久手町の山々ではこれらの山茶碗や小皿を焼く窯が順次築かれたものであろう。

今回の調査をきっかけにして、尾張旭市長坂古窯（註2）と旭ヶ丘第2号窯（註3）で出土した山茶碗（第11図）を比較してみると、外形はほとんど変わりがないが、底部の糸切跡が残っているのに対して三ヶ峯第9号窯と第12号窯の山茶碗では糸切跡が残っていないという特徴がある。これが工人の差によるものか地域の差によるものか今後の課題である。

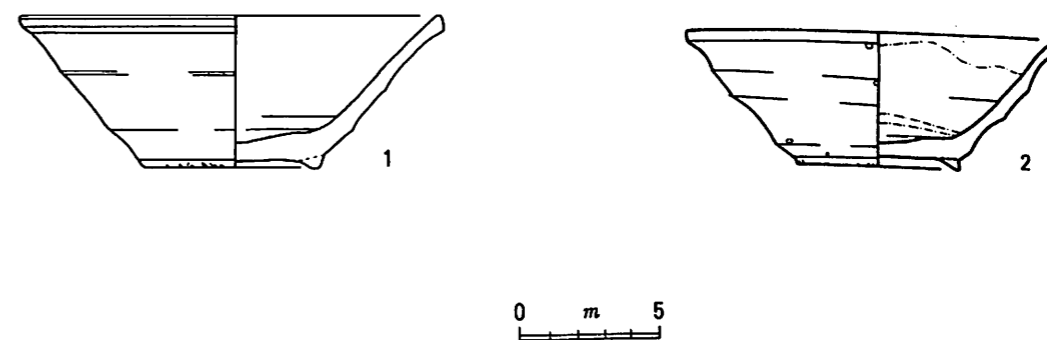


第9図 第12号窯灰原Iトレンチ東壁断面図  
1. 窯壁等残欠 2. 灰色粘土層  
3. 黄褐色土層 4. 茶褐色砂質土層（自然層）

遺物（第10図の1～4） 第12号窯の灰原から、試掘調査時に採集した5個体を含めて7個体の山茶碗が出土したがいずれも破片で、全体の形状を知ることができないものはなかった。高台の直径は5.2～5.4cm、高台は低く2～3mmである。高台の内側は外側のつけ方に比較するとていねいになでつけている。また、高台は底部よりやや内側につける傾向がある。胎土には長石が混ぜられていて、噴き出しているものが多い。第9号窯で焼成された山茶碗と同形であると考えられる。



第10図 第12号窯灰原出土遺物実測図



第11図 長坂古窯出土遺物（1）、旭ヶ丘第2号窯出土遺物（2）実測図



- |    |          |
|----|----------|
| 1  | 根獄第1号窯   |
| 2  | 市ヶ洞第1号窯  |
| 3  | 市ヶ洞第2号窯  |
| 4  | 丁子田第1号窯  |
| 5  | 片平古窯     |
| 6  | 鴉ヶ狭間古釜   |
| 7  | 棒振第2号窯   |
| 8  | 堀越古窯     |
| 9  | 三ヶ峯第3号窯  |
| 10 | 三ヶ峯第4号窯  |
| 11 | 三ヶ峯第11号窯 |
| 12 | 三ヶ峯第1号窯  |
| 13 | 三ヶ峯第2号窯  |
| 14 | 三ノ池古窯    |
| 15 | 三ヶ峯第8号窯  |
| 16 | 三ヶ峯第6号窯  |
| 17 | 三ヶ峯第7号窯  |
| 18 | 一ノ井第1号窯  |
| 19 | 三ヶ峯第12号窯 |
| 20 | 三ヶ峯第9号窯  |
| 21 | 三ヶ峯第10号窯 |
| 22 | 茨ヶ狭間古窯   |
| 23 | 福井古窯     |
| 24 | 木の洞古窯    |

第12図 長久手町古窯分布図

なお、三ヶ峯第9号窯と第10号窯は1994年愛知県教育委員会発行の『愛知県遺跡地図（I）尾張地区』の「平針」図幅に遺跡番号15034と15035として登録されているが、このうち第10号窯の窯体は豊田市域にあるので豊田市に組み入れられるべきもので、遠からず豊田市の古窯として登録されることになり、長久手町から三ヶ峯第10号窯は抹消されることになる。第12号窯は新たに発見された古窯でこの名称で登録されることになる。

これらの古窯は、現在の行政区画では区別されるものであるけれど丘陵全体から古窯の分布と生産形態が論じられなければならない。また、13世紀の三ヶ峯地区の所領の在り方も視野にいれなければならないだろう。

註1 藤沢良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』三重県埋蔵文化財センター 1994年3月）

註2. 七原恵史・西川不二夫「長坂古窯」（『尾張旭市の古窯』 尾張旭市教育委員会 1978年）

註3. 七原恵史・仙田作吉『尾張旭市 旭ヶ丘古窯址』アイジー開発協同組合・尾張旭市教育委員会 1989年

参考文献 『長久手町史 資料編五 考古』長久手町 平成9年

報告書抄録

ふりがな	さがみねこようはくつちょうさほうこくしょ							
書名	三ヶ峯古窯発掘調査報告書							
副書名	第9号窯・第10号窯・第12号窯							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	七原恵史							
編集機関	三ヶ峯第9号窯・第10号窯・第12号窯発掘調査会							
所在地	〒480-1196 愛知県愛知郡長久手町大字岩作字城の内60番地の1 Ⅱ 0561-63-1111							
発行年月日	西暦1999年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ - ド		北緯 〇'〇"	東経 〇'〇"	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三ヶ峯古窯跡	あいちけんあいちぐん ながくてちょうおおあ ざやざこあざさがみね 愛知県愛知郡 長久手町大字 岩作字三ヶ峯	23304	15034 15035	35°4'4"	37°56'9"	19981116 ～ 19981125	30	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
三ヶ峯第9号窯	古窯	鎌倉時代	古窯・灰原		山茶碗・小皿			
三ヶ峯第10号窯	古窯	鎌倉時代	古窯					
三ヶ峯第12号窯	古窯	鎌倉時代	灰原		山茶碗			

三ヶ峯第10号窯現況  
(西から)



三ヶ峯第9号窯  
遺物散布地付近の  
状況(南西から)

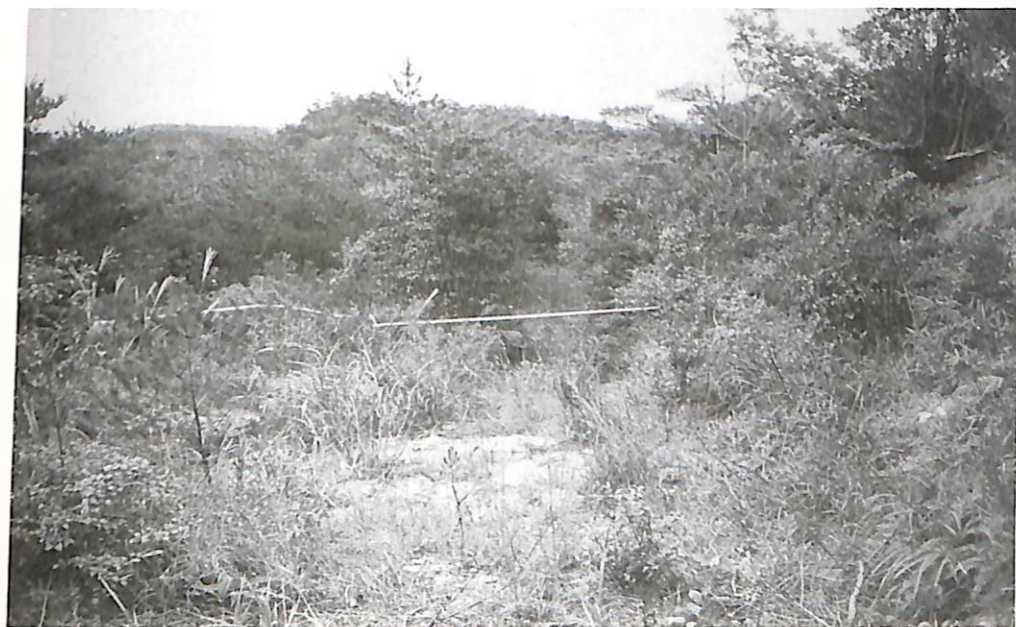


三ヶ峯第9号窯  
遺物採集状況





三ヶ峯古窯跡付近遠景  
(南から)



三ヶ峯古窯調査直前の状況  
(北東から)



三ヶ峯古窯付近  
丘陵崖面の状態



三ヶ峯第9号窯  
窯体残存部の調査  
状況（東から）



窯内に遺存した  
遺物の出土状態  
（東南から）



窯内清掃作業状況  
（東南から）



三ヶ峯第9号窯  
遺存した窯内の状態  
(南から)



遺存した窯内を  
上から見た状態



遺存した窯体 (東から)





三ヶ峯第12号窯  
灰原付近の状態  
(南西から)



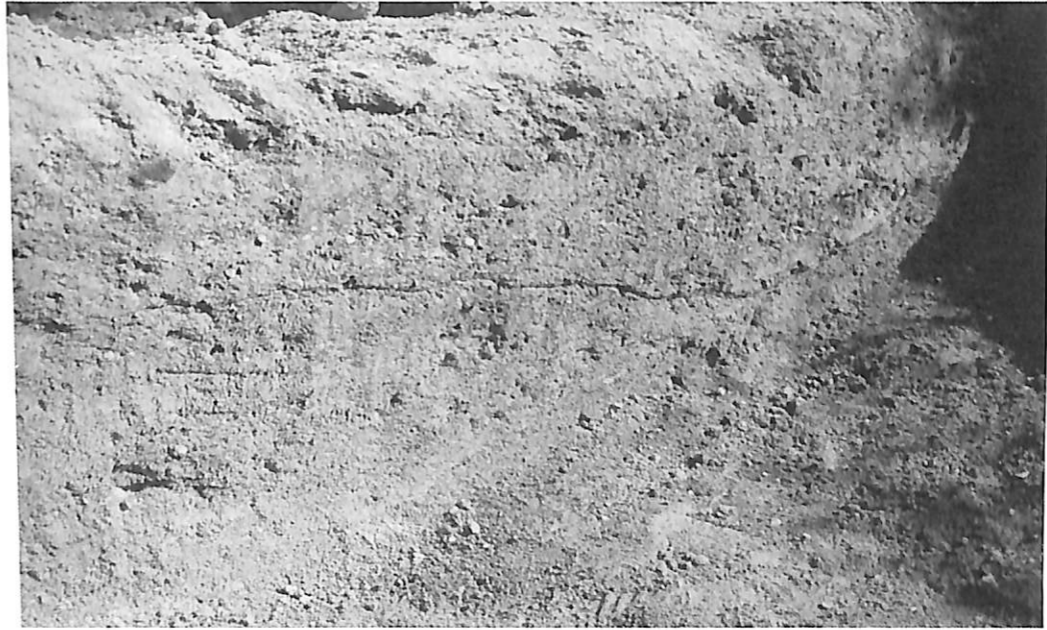
調査状況



遺物散布の状況



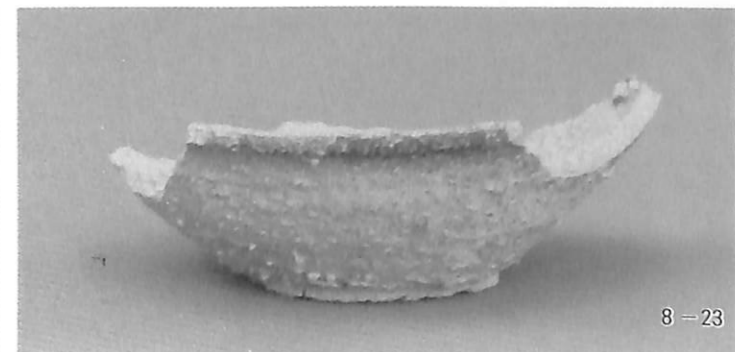
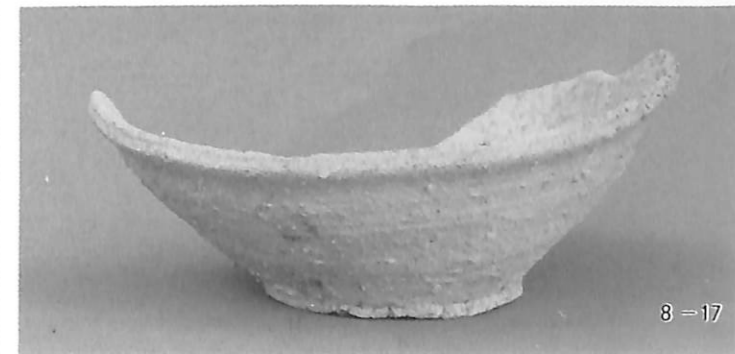
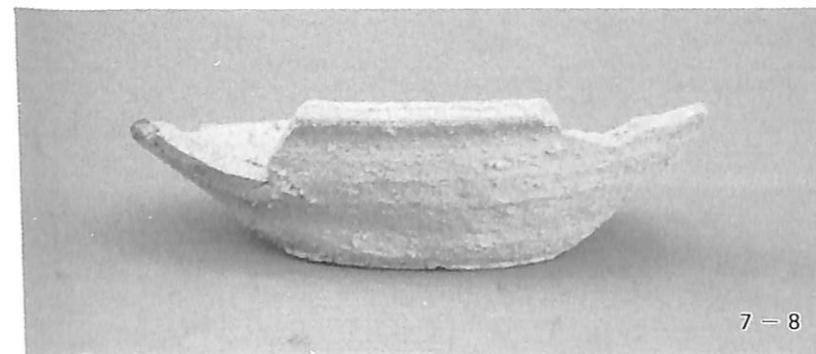
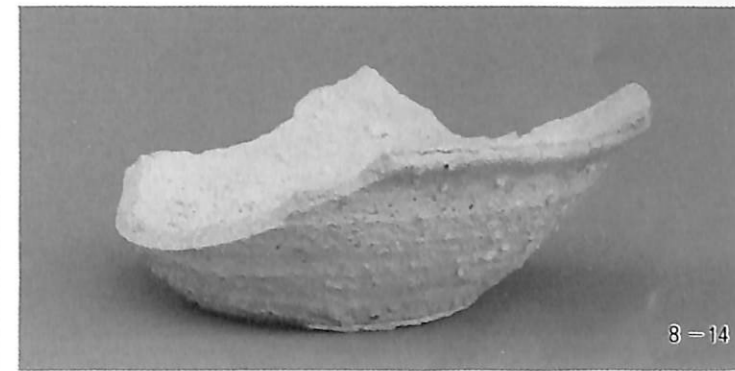
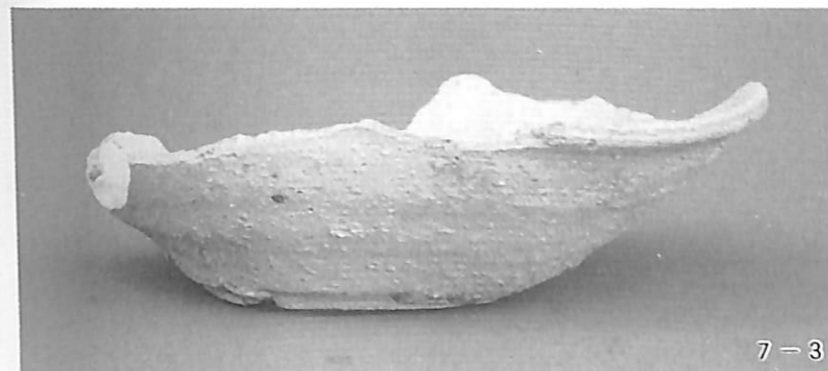
三ヶ峯第12号窯  
灰原に設定した  
トレンチの状態  
(北西から)

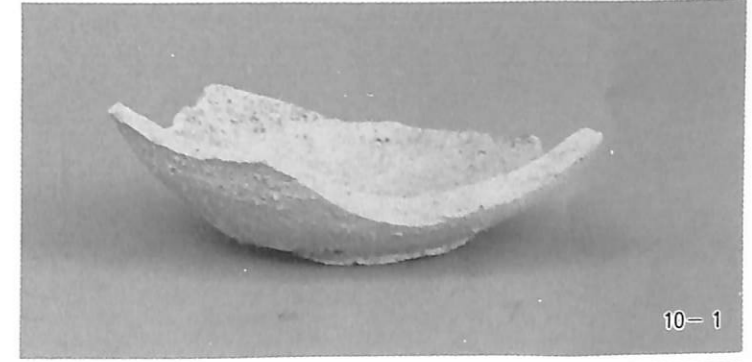
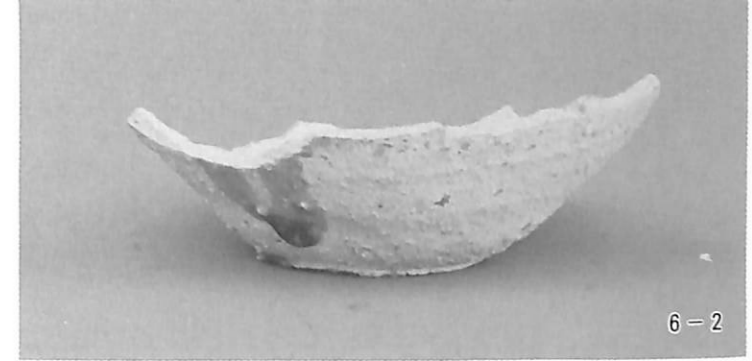
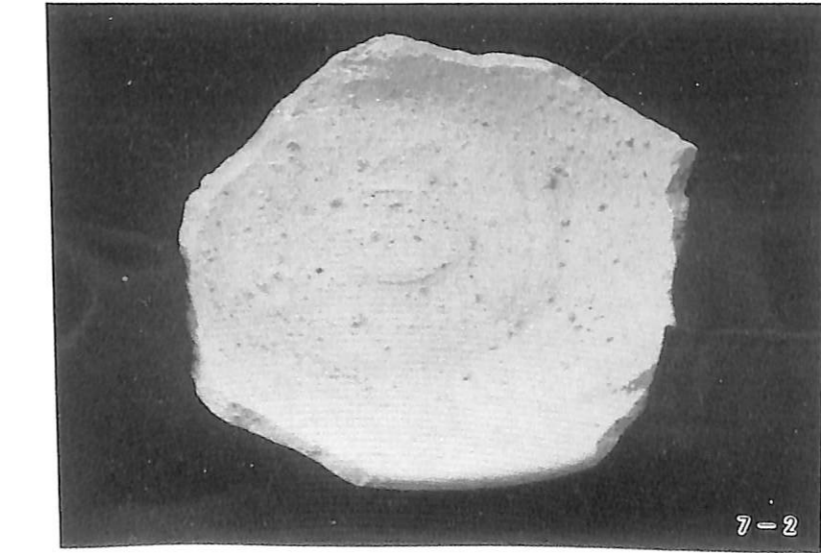
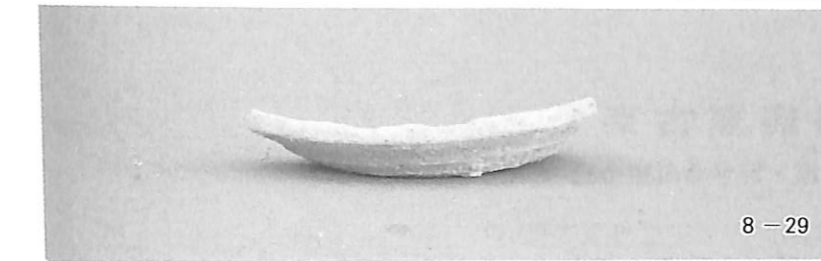
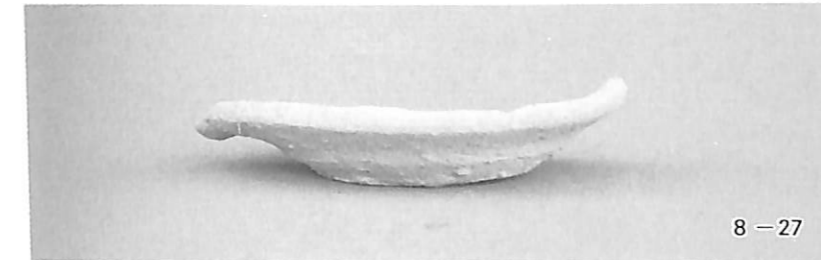


I トレンチ断面  
(南西から)



I トレンチ南東側  
断面の状態  
(北西から)





## 三ヶ峯古窯発掘調査報告書

— 三ヶ峯第9号窯・第10号窯・第12号窯 —

---

平成11年3月19日  
編集・発行 三ヶ峯第9号窯・第10号窯  
第12号窯発掘調査会  
愛知郡長久手町教育委員会社会教育課内  
印刷 有限会社 光 版 社

長久手町中央図書館

00881171

